

サルボボの容姿の変遷に伴う縫製方法と 赤い布で作られた意味の研究

徳山孝子

家政学部家政学科家政学専攻

(2001年9月13日受理)

A Study on the Sense of Sewing Ways with the Change of SARUBOBO'S Red Clothes

Department of Home Economics, Faculty of Home Economics,
Gifu Women's University, 80 Taromaru Gifu, Japan(〒501 - 2592)

TOKUYAMA Takako

(Received September 13, 2001)

1. 緒言

飛騨の土産物屋にサルボボ人形(写真1)がある。サルボボは、胴体と顔が赤い布で作られ、黒の頭巾をかぶり、黒の前掛けをした顔が描かれていない人形である。サルボボの由来は、雪深い飛騨では外に出ることも少なく、子供の玩具もあまりなかったため、ばあちゃんが子供達のために手作りの人形を「サルボボ」といって与えたのが始まりである。サルボボの語源は「サルのように顔の赤い赤ちゃん」に、飛騨弁の「ボボ」が赤ちゃんの事を示し、サルボボの名前がついたとされている¹⁾。サルボボにはお守りの役目があり、購入者の護守となっている。その役目は安産、子供の成育、家庭円満、魔除けなどである。

現在、飛騨の観光地化が進み、マスコットやキーホルダーとして色とりどりのサルボボが売られているが、伝統的に伝えられたサルボボの色は赤色であり、赤色以外で作られているサルボボは見かけられない。

今までのサルボボに関する研究は「会報斐

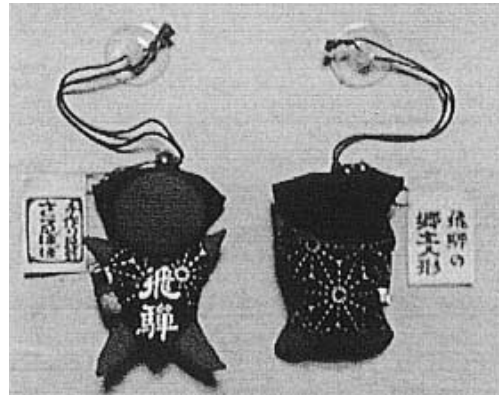


写真1 飛騨の土産にあるサルボボ人形

陀」²⁾より、サルボボの役目は、室町時代からある人形のお守りと似ていると報告されている。また、サルボボの形は、庚申信仰の庚申の申・さるの意味から誕生したサルの形をした人形と容姿が似ているところからつながりがあると示している。しかしながら、室町時代からあるお守りの人形は、現在飛騨に売られているサルボボのように赤い布で縫われている人形ではなかった。

そこで、サルボボの変遷を辿るとともにサ

ルボボの縫製方法と赤い布で作られた意味を明らかにすることを目的とした。

2. サルボボがもっている意味から考えられる人形；天児と這子

サルボボの起源と考えられる人形は、安産、子育て、魔除けなどのお守りの役目と同じ意味を持つ天児といわれている。天児の歴史を辿ると『古典の人形』³⁾では、

「天児」は古く平安朝時代(795年頃)から我が国にあったと言われているが、室町時代(1400年頃)になるにつれて、ようやくこれを利用する風習が盛んとなり一般に作られて広く用いられるようになった。

と記されている。子供の身代わり人形として天児を使用する風習は主に、宮中や、公家、武家などの上層階級の家庭で行われていたが、室町時代になるにつれ一般化していった。

天児は、愛児の将来が幸福に恵まれるようにという願いをこめ愛児が誕生する際に作り、その天児は産室に飾られた。天児は、愛児にふりかかるかもしれないあらゆる悪事災難を負わせ、被い浄める身代わり人形として使用された。天児は、男子・女子によって使用の仕方が異なっていた⁴⁾。

男子の場合には十五歳頃まで、大切に保存され、其後は神前において焼きすて又は川などに流して感謝したのである。それと言うのも男子としては十五ともなれば、もう一人前となり自分で我が身を護り、立派に独立してゆけるので「天児」の目的と使命は充分に果たされたものと、見做されたためである。一方女子の場合には、長く保存され、長じて他家に嫁ぐに際してこの天児を婚儀の調度品の中に加えて持ち行かせたというが、これは女子の生活が男子と異り、結婚後も何

かと気遣われる親心から、他家での夫婦生活が円満且つ幸福にいくようにと、願い求める心が罩められていたためであろう。

と記されている。自分にまだ責任を持たず、親に守られている幼少時代は、男子・女子も将来、幸福な人生に恵まれるようにと願いが込められているが、成人になったと見定められたところで役目は分かれ、それぞれの前途を祈った。

天児は、犬筥(写真2)と守り刀も一緒に産室に飾られた。犬筥は犬を表した張子の雄雌一對の容器である。犬というのは悪霊を退散させるといわれ、主人によく使え、絶対服従するうえ、お産が軽く、生育が良いということから縁起がいいものという事に由り、犬を象った犬筥を産室や子供の枕もとに飾り、安産や生育のお守りとした。守り刀は、現在でもカミソリや刀を死者の上におき、死者を送る風習が残っている。刀などは力強い物の象徴とされ、悪霊を切り、死者の憑いて行かないようにという意味で、天児と一緒に飾られた。天児自体に子供の将来を願う意味がこめられているが、犬筥と守り刀と一緒に飾ることで、より新生児の無事息災を願うものになったのではないかと考えられる。



写真2 犬筥

天児の容姿や作り方は、

「あまかつ」は一本の丸い竹(30cm位)を

横にして人形の両手とし、縦には竹を二本束にして胴体に使っています。その上に白い絹で頭を作ったのせています。目、鼻、口、髪の毛は描かれていますね。簡単ですが衣装も着せています。と記されている⁵⁾。写真3が実際の天児であり、簡単に人間の雛型を象り、単純な製作方法で作られている。写真4は衣装を着ている天児であり、子供の成長に合わせて生衣を着せたり、季節の衣装に着せかえた。天児の容姿はサルボボと似ていないが、天児の持つ意

味とサルボボの持つ意味とが重なることからサルボボに深く関係している人形であると考えられる。

「会報斐陀」⁶⁾によると、「天児ははうこのことなり」、また『魔よけとまじない』⁷⁾にも「縫いぐるみの這子は、もとは天児から出たものといわれている」と記され、天児と這子は同じ人形だと考えられる。這子は、天児と同じ安産や魔除けの意味を持っている人形である。這子の役目は、天児と同様、子供にふりかかるかもしれないあらゆる災難の身代わり人形である。

『古典の人形』⁸⁾に「室町時代からの文献に、「這子」または「御伽這子(婢子)」というものがみられる」とある。この文献によれば室町時代に這子はあったのだが、江戸時代に大変流行したということから、一般に見られるようになったのは江戸時代からであると考えられる。

這子は、魔除けとしても使用され、お祓いの方法であるが『魔除けとまじない』⁹⁾に、「這子」の方は「母子」と呼ばれるようになり、母と子のからだをなでたのち、水へもってゆき、これを解いて母子の無事息災を祈ることが行われたが、この習俗は、母は産後の肥だちがよいように、幼児は健全に育つようにとのまじないである。

と記されている。母子についている穢れや禍を這子に負わせ、水辺でこれを解く事により、母と子の健康を祈る風習であった。写真5の子を背負っているサルボボに、母子の意味がこめられている事がわかる。この写真からも這子という人形が、サルボボへ変化していった人形ではないかと裏付けられる一例だと考えられる。



写真3 天児



写真4 衣装を着ている天児

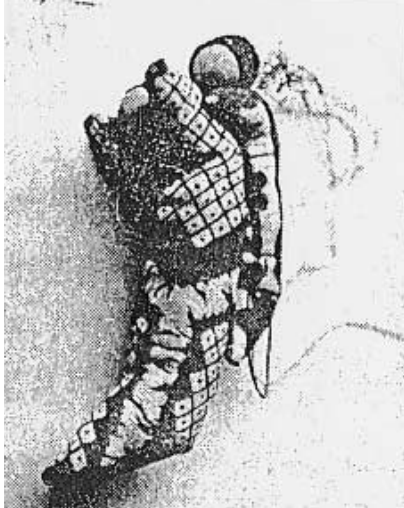


写真5 子供を背負うサルボボ

3. 縫製方法からのサルボボの変遷

這子の容姿は、這い這いする嬰兒を象った縫いぐるみ人形であり「会報斐陀」¹⁰⁾に、室町時代の御産之規式に這子の作り方が記されている。

あまがつの作り様、白練の絹1幅を四方に裁ちて、端を丸く縫ひめぐらして、綿を入れて糸を引しむれば、まりの如く丸くなる。それを頭にするなり。又白練の絹一幅を二幅のたけに裁ちて、四隅を縫い合わせて、綿を入れて腹にてくけて胴にするなり。手足もできるなり。

とある。これは這子の作り方の説明であるが「あまがつの作り方」となっているのは前途で説明したように「天児ははうこのことなり」という事で、この場合「あまがつ」として記している。

この御産之規式に記されている這子の作り方には、髪の毛と顔については書かれていないが、絹糸で作られた長い黒髪を二つに分け、前で金紙を使い束ねており、目鼻と口が描かれたものが這子である。

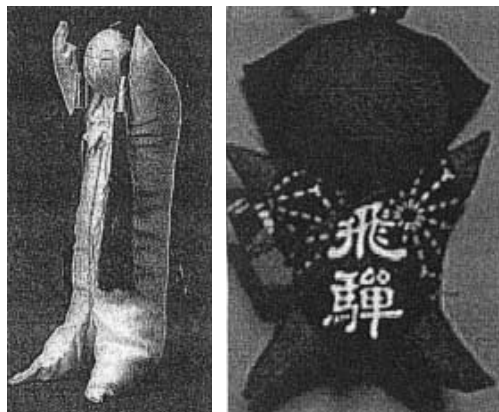
這子は『古典の人形』¹¹⁾によると

男子ならば特にその口を引締めて表し、女子ならば口を徐ろに開いたように描く定規があるという、これは男子は口を引締めることに依って、その威を現し、また女子はそれを開くことに依って陰陽の性別を現し、作者の意図するものが作られたという可きである。

とあり、男子と女子では顔の描き方が違っていた。這子の大きさは『魔よけとまじない』¹²⁾によると

『栄花物語』本の零に小法師をたたえで「小さき地蔵菩薩はかくやおはすらん」とみえ、また「天児などのもの言ひて動くとも見ゆ」などあるところをみると、かなり大きなものだったと思われ、おそらく二、三歳の子供ぐらいの大きさだったであろう」とあり、御産之規式に記されている「白練の絹一幅を二幅のたけに裁ちて...」

とあるところから約36cmほどの大きさであった事がわかった。這子とサルボボの大きさ、髪の毛の有無、顔の描かれているかの有無は異なるが、容姿は似ていることがわかった(写真6)。



這子

サルボボ

写真6 這子とサルボボの形態の違い

這子は、幼児の玩具として江戸時代に大変

流行した縫いぐるみ人形である。幼児専用の人形として使用され、『魔よけとまじない』¹³⁾には、

『仙源抄』にも「あまかつ三歳まで用之。
諸事凶事これにおほする也」

とあり、三歳くらいまでの子に与えていたとされる。また、『図説日本の人形史』¹⁶⁾に、

「絵本廬の塵」長谷川光信画寛暦頃
(1750年代)刊

被いのための這子はやがて玩具用の人形として用いられるようになる。縫製の練習にこれを縫ったことは画中に記された「鶯の手や垣へはふこの縫ならひ」の句でも知られる。なお頭だけは人形屋で求めることもあったという。

とあり、写真7が裁縫の練習風景が記されている。右下の女子が左手で持っている人形が這子である。この絵は、縫製の練習に這子を作っている絵である。這子は、魔除けとして使われるお守りで、神聖なものであるにも関わらず、縫製の練習で這子を作ると言う事は、それだけ一般化した人形だったと考えられる。



写真7 裁縫の練習に這子を使用している風景

4. サルボボが赤い布で作られた意味とは

天平7年(735)筑紫(北九州)に疱瘡が発生し、九州各地のみならず、全国的に流行した。疱瘡は、ヒトからヒトへの感染で維持される急性熱性伝染病であった。疱瘡の罹患

率、死亡率は、時に死亡者の64.8%を占めた。文化元年(1804)家族内の場合は80%以上が罹患し、寛政7年(1795)米沢藩内では8389人が罹患し、2614人が死亡したという¹⁴⁾。この疱瘡は飛騨の民にも襲い掛かった。

白川郷村々の民は、古しへより疱瘡を忌み嫌ひて、高山町又は川上郷村に疱瘡の病人ある家の前を通。押並べて流行する折には無據事ありても村を出ず、疱瘡すみて後に出る也。若他郷にて伝染せし者は他郷に頼みて臨床をも療治をも他に任せ、然して平愉して後、村に帰らせ、又頼むべき方もなき者は、その山中に小屋を掛けて、往年疱瘡の済し人を雇ひて、糧を齎せて病人を介抱させ、すみて後、家にかえらすぞ、益田郷の内、竹原郷内和佐辺もみな疱瘡を忌避るとぞと記しているように¹⁵⁾、飛騨の民が疱瘡をどれほど恐れていたのかがわかる。しかしながらこれほど恐ろしい病である上に、予防法も無く、医者 of 積極的治療もなかった。

神の有無はしばらくおいても、疱瘡は穢気不浄を忌むものだから、その居間に神がいると思えば自ら洗浄を心掛けるようになって痘者のためにも良い。ことに病中に神を祭って祝うことは精神的にも快適なものだから良いだろう

と疱瘡神を祀って病気が治る事を祈っていた。この疱瘡神が赤色を好む神と考えられ、疱瘡に罹ったヒトは、赤ずくめで疱瘡という病と闘っていた。

病室を暗くしてしめなわを張り、赤紙の幣をたれ、その中に神棚を設けて紅紙を敷く。赤い狸々人形をその真中に置き、御神酒徳利二つに紅紙を口に巻き、赤餅、赤染、赤鯛、金糸魚の類を供えて常灯明で後述の一番湯まで祀る、というのが一般の病室光景だった。

疱瘡は紅色を尊ぶものだから、すべて衣類や備品までも紅を好むと説明され、糯米と鯛はよく発痘し経過が良くなる効があり、酒は陽気補養の力があるので、酒を好む痘児には時々与えて差支えないとされた。

とある。また『疱瘡神』¹⁶⁾に、

赤(朱)の色は、疱瘡をめぐる習俗・表象に見られる基本的な色彩である。疱瘡への対抗策のあらゆる場面に登場するこの色は、治療の上で、また、疱瘡についてのさまざまな観念の上で、たいへん複雑で、かつ深い意味を持っている。(中略)『小児必用養育草』の中の「痘瘡の病人、居所しつらひやうの説」の章では、痘瘡すでに一点あらはるゝ時にいたらば、まづ一間なる所をいかにも綺麗に掃除して、屏風をひきはまし、乳香といふ薬を、香をたくごとに、少づゝくべて、穢れ不浄をさけ、冬の月には、純帳或は紙帳の類をたれて、其外には炭火を置きて、寒邪をふせぐべし、夏の月は、蚊帳をたれて、蠅や蚊なんどの、痘瘡の上に止まることを禁ずべきなり、屏風衣桁に、赤き衣類をかけ、そのちごにも、赤き衣類を著せしめ、看病人も、みな赤き衣類を著るべし、痘(いも)の色は、赤きを好とする故なるべし、すべてその間に、穢れたる臭(か)をいむべし、毎朝夕水をそゝぎ、注連縄(しめなわ)をひきて不浄をさくべきなり。

とあり、この事から赤色が疱瘡に対して、いかに効力を発揮していた色なのかがわかる。『ちちんぶいぶい』¹⁷⁾に、赤色の呪力について記されている。

赤は、危険信号の色として、世界に広く通じる。それで侵入を止める、あるいは封じる。それは、単色としてヒトの目に

もっとも強く衝撃を与える色であるとす。今日的解釈からするとその色彩生理学の応用である。いとなれば、赤を文明的にとらえてのこと。それを私ども日本人が文化的にとらえると、「魔除けの色」となる。ただ単に人をとめる・封じるのではない。悪霊や厄災を威嚇して未然に追い払う、その霊性を投影しているのである。もっとも古くさかのぼってたしかめられるのは、『日本書紀』の「赭(そほこ)を以て掌に塗り、面に塗って」という記事である。兄火酢芹(ほのすせり)の命の魔術を防ぐために手や顔を赤く塗った、というのである。

とある。これらの事から、疱瘡が流行し、疱瘡が早く治癒するように、病状が軽くてすむようにという願いが叶えられ、魔除けや災難よけの代表といわれる赤色を身の周りの物に使用していた事がわかった。その身の回りに使用した一つに人形が挙げられる。

『図説日本の人形史』¹⁸⁾に、

「小児必用養育草四」より香月啓益著
元禄十六年(1703)刊

襖いの人形ではないが、民間信仰として広く行われたものに疱瘡の病児のための赤の玩具がある。麻疹とともに小児の命定めといわれた疱瘡には赤いものが効能があるとされ、着物はもちろん、玩具から絵草紙に至るまで赤一色のものを与えたのである。絵の子供の前に並ぶのも赤い人形であろう。

と記されている(写真8)。また這子は、本来白練絹で作られている人形であったが『陰陽道の本』¹⁹⁾によると、

這子はしばしば赤い布で作られた。子供の恐ろしい病である「ほうそう」の神が赤色を好み、子供の代わりに這子につくとされたからである。

とあり、赤い布で作られていた這子が存在することがわかった。



写真8 疱瘡に罹った子供の病室内の風景

このように、疱瘡神の好む赤色で身の周りをかこみ、疱瘡が軽くてすむ事を願った。それまで白練絹で製作されていた縫いぐるみ人形の這子も、疱瘡が流行り、疱瘡には赤色が効力を示す事から赤色の布を使用し、作製されるようになったと考えられる。この時の習俗だけが、疱瘡が消滅してもそのまま残り、赤色の布で作られ伝えられてきた物が、飛騨のサルボボの赤色であると考えられる。

5. 結論

サルボボは、安産、子育て、魔除けの意味を持つ人形である。そこでサルボボの意味からサルボボの変遷を辿るとともに、サルボボの縫製方法、サルボボが赤い布で作られた意味を明らかにした。

- 1) サルボボと同じ意味を持つ人形は、室町時代に使用されていた天児、這子であることがわかった。這子は、白練絹で頭と胴体が作られ、頭と胴と手足に綿などを

詰めて、幼児が這い這いする姿を象った縫いぐるみ人形である。頭には黒い絹糸で髪の毛が植えられ、目と鼻と口が描かれている。容姿の上でもサルボボと似ており、赤い色で作られた這子があったことから、這子がサルボボとつながりがあると考えられる。また、這子は安産などの意味もこめられ、サルボボの持つ安産や子育ての意味と同じであることがわかった。

- 2) 縫製の練習に這子を作っている練習風景の挿絵があった。這子は、魔除けとして使われるお守りで、神聖なものであるにも関わらず、縫製の練習で這子を作ると言う事は、それだけ一般化した人形であったと考えられる。
- 3) サルボボが赤い布で作られようになった理由は、天平7年に疱瘡が流行したことに関係していることがわかった。疱瘡は、死に至る確実が高い急性熱性伝染病であり、予防法もなく医者が積極的な治療もなかったことから、助かりたい一心で疱瘡神をまつり、病気が治る事を祈った。この疱瘡神が赤色を好み、人間の代わりに這子に憑くようにという願いをこめ、這子を赤色で作る事があった。このような事実があり、赤い布で作られた這子の流れを汲んで、サルボボが赤い布で作られるようになったと考えられる。

本研究を担当した本学学生、山下由香利さんに感謝致します。

引用文献

- 1) 田中彰：「サルボボの由来」, 高山市教育委員会
- 2) 田中彰：「会報斐陀」, 高山市歴史研究会, 1992, P29~36
- 3) 西沢笛畝：『古典の人形』, (株) 芸艸

- 堂, 1958, P13~14
- 4) 前掲(注3), P15
- 5) 八木秀樹: 『ひな人形をつくる』, 大月書店, 1992, P15
- 6) 前掲(注2), P31
- 7) 中村義雄: 『魔除けとまじない』, 塙書房, 1985, P160
- 8) 前掲(注3), P21
- 9) 前掲(注7), P161
- 10) 前掲(注2), P31
- 11) 前掲(注3), P15
- 12) 前掲(注7), P158
- 13) 前掲(注7), P157
- 14) 山田徳兵衛: 『図説日本の人形史』, 東京堂出版, 1991, P26
- 15) 須田圭三: 『飛騨の疱瘡史』, サンメッセ株式会社, 1992, P7~9
- 16) ハルトムート・オ・ローテルムンド: 『疱瘡神』, 岩波書店, 1995, P54
- 17) 神崎宣武: 『ちちんぷいぷい』, 株式会社小学館, 1999, P59
- 18) 前掲(注14), P27
- 19) 増田秀光: 『陰陽道の本』, 株式会社学習研究所, 1993, P95